

協会設立45周年にあたって、コロナ禍で協会の活動も転機を迎えている中、5年後の50周年に向けて、様々な取り組みの将来構想を考えてみたい

協会設立のDNAを紡いで ~夢洲に自然保護区を~

文・写真 加賀 まゆみ (夢洲生きもの調査グループ)

2019年1月、理事会で初めて夢洲を視察したとき、雨水池には5000羽を超えるカモが集い、猛禽が頭上をホバリングする光景に、ここは本当に大阪市内なの？と驚愕した。それから100回以上調査に通うことになったが、訪れるたび新発見に驚喜し、徐々に失われていく姿に憤り悲しんだ。もちろん「IRカジノや万博に向けて、生物多様性ホットスポットが失われる」と知ったからこそ調査し始めた夢洲である。でも「開発計画は決定済み」とあきらめたくはない。

この3年は感染症の流行、今年になって戦争やエネルギー危機、そして疲弊する経済、と想定外の障害が次々発生している。東南海トラフ地震の可能性も高い。行政が描く夢洲の未来都市計画図も、私たちの生活同様不確定だ。

現在埋め立てがかなり進んだが、南エリアの水辺はまだ残っている。野生の復活力には期待できるはずだ。だから、夢洲に偶然できた自然環境を万博中も最大限生かした形での保全を、と、引き続き頑固に要望し続けたい。

私の手元に高田直俊前会長から預かった一冊の冊子がある。「大阪湾にシギ・チドリの楽園を-大阪南港の野鳥を守る会の17年-」(写真-1)、保全協会が設立されるきっかけとなった50年前の市民運動の記録である。当時社会運動とは無縁の野鳥好きの若者たちが、どのようにして、現実の壁にくじけそうになる心を奮い立たせ、仲間を増やし、野鳥園づくりを実現していったか、要望書やデータなども交えて、まとめられている。

1968年暮れ、「南港の野鳥を守る会」は発足した。私たちが夢洲の自然保護について初

めて要望書を提出したのが2018年11月。奇しくもちょうど50年目にあたる。野鳥園開園まで15年を要した。当時仲間の下宿で毎夜相談や作業をした様子が書かれている。今の夢洲メンバーはほとんどがシニア世代。この先10年粘り強い活動ができるか不安はある。

しかし当時と社会事情が全く違い、世界中がオンラインでつながり、運動は発信力とイメージ戦略の情報戦だ。オンラインでの強みを生かし、全国規模の団体と協働で活動を始めた。これは大きな強みで、今後もどんどん他団体や同じ意見を持つ個人とつながっていききたい。

反面、膝突き合わせて討論する機会が減ったことで、本音のぶつかり合いができず、目標の明確なすり合わせが課題となっている。ともすれば、現実の壁の前でフェードアウトしそうな時もある。そんな時、「大阪に偶然できた自然を大切に残す、という50年前の先輩方のDNAをこれからの未来に紡いでいかねば・・・」そう思って活動している。

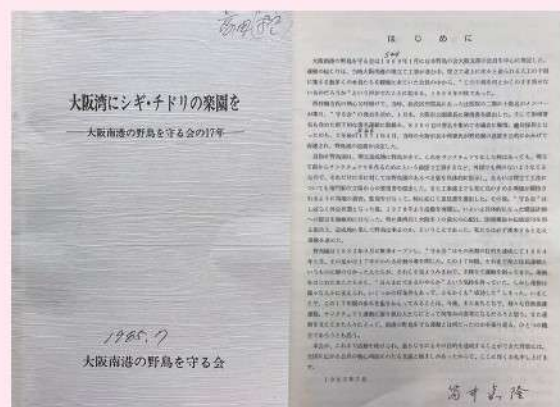


写真-1 南港の野鳥を守る会の冊子。協会初代会長筒井嘉隆氏、日本野鳥の会現会長上田恵氏、高田直俊前会長、栗谷理事、他協会員数名の寄稿も収められている。